

SNS の適正利用の啓発を目的としたコンテストの実施

井上 仁¹⁾, 東野 正幸¹⁾, 大森 幹之¹⁾, 木本 雅也¹⁾, 本村 真一¹⁾, 石田 雅¹⁾,
近藤 博史^{1),2)}, 川村 尚生^{1),3)}

- 1) 鳥取大学 総合メディア基盤センター
 - 2) 鳥取大学 医学部附属病院
 - 3) 鳥取大学 工学研究科情報エレクトロニクス専攻
- masashi@med.tottori-u.ac.jp

A contest aimed at education of proper use of SNS

Masashi Inoue¹⁾, Masayuki Higashino¹⁾, Motoyuki Ohmori¹⁾, Masaya Kimoto¹⁾,
Shinichi Motomura¹⁾, Masaru Ishida¹⁾, Hiroshi Kondoh^{1),2)}, Takao Kawamura^{1),3)}

- 1) Information Media Center, Tottori University
- 2) Tottori University Hospital
- 3) Graduate School of Engineering, Tottori University

概要

Facebook、Twitter や Line といったソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS: Social Networking Service) の利用者が増加している。それに伴い、悪ふざけや個人のプライバシー情報を発信したりといった、SNS の不適切な利用によるトラブルや事件・事故も多発している。鳥取大学では、学生がこのような SNS に関する事件・事故の加害者・被害者になることがないように、大学が一丸となって課題解決に取り組むことを目的として、平成 25 年度より SNS 啓発作品コンテストを実施して学生への啓発に取り組んできた。本稿では、本校で実施した SNS 啓発作品コンテストの概要とその成果について報告する。

1 はじめに

近年 Facebook、Twitter や Line といったソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS: Social Networking Service) の利用者が増加している。調査¹⁾によれば、SNS の利用者は 2015 年末に 6451 万人にも達するといわれている。平成 28 年度の鳥取大学入学生を対象としたアンケート調査では 98%の学生が SNS を利用していると答えている。SNS を利用することで、友人や知人とのコミュニケーションが容易になるというだけでなく、共通の趣味でつながったり、「友だちの友だち」という新しい人間関係を生み出す機会を増やすことができる²⁾。また SNS を利用すれば、見ず知らずの不特定多数の人へ容易に情報を発信することができる。従来、不特定多数へ情報を発信することができるのは放送局や新聞社といったマスメディアに限られており、そこから発信される情報は、新聞倫理綱

領や放送倫理検証委員会等によって発信する情報の質が保たれている。一方で、SNS の利用者の中には倫理観に欠けた人や情報を発信することの危険性を理解していない人もいることから、不適切な情報発信によるトラブルや事件・事故が相次いで起きている。大学生が USJ での悪ふざけの様子を SNS に投稿した事件³⁾、アルバイトの学生が来店した有名人のプライバシーを発信した事件⁴⁾、看護学生が通院患者の情報を発信した事件⁵⁾等々が大きく取り上げられた。このような事件が発生すれば、情報発信した本人が特定されて非難をあびるだけでなく、その個人が所属している組織の評判をも失墜させる事態となる⁶⁾。

鳥取大学では、学生がこのような SNS に関する事件・事故の加害者・被害者になることがないように、大学が一丸となって課題解決に取り組むことを目的として、平成 25 年度より SNS 啓発作品コンテストを実施している。本コンテ

ストは、学生からの SNS 啓発に関する啓発ポスターやプレゼンテーションの応募を通して、学生の SNS 適正利用の意識向上を目的として開催しており、本年で 4 年目を迎えた。コンテストは鳥取大学の学生と附属中学校の生徒を対象として行ったが、本稿では、大学生の部について、その取り組みと成果を報告する。

2 SNS 啓発作品コンテスト

公募した作品の種類と公募年度は以下の通りである。

- (1) ビデオ：3 分程度。DVD で提出。（平成 25 年、26 年）
- (2) ポスター：手書きもしくは電子媒体での提出（平成 25 年～28 年）
- (3) スライド：タイトルを含めて 6 枚まで。PowerPoint ファイルでの提出（平成 25 年～27 年）
- (4) 4 コマ漫画：手書きもしくは電子媒体での提出（平成 25 年～28 年）
- (5) プレゼンテーション：PowerPoint を用いた 5 分以内の口演発表（平成 28 年）

平成 25 年度から 27 年度に公募した作品では、全てについて未発表のオリジナルな作品を要求した。その結果、応募してくる学生は絵やイラストの才能のある学生に限られてしまうという傾向が見られた。絵心が無くて訴えたい内容をうまく表現できない学生にも門戸を広げ、もっと多くの学生に当コンテストへの関心を持ってもらうために、平成 28 年の第四回では 5 分以内の口演によるプレゼンテーションの部を設けた。このプレゼンテーションの部は 1 年生の必修科目である情報リテラシの授業とタイアップして行った。すなわち、情報リテラシの授業の中で SNS の適正利用に関する課題を学生に課し、その学習成果を持ってコンテストでのプレゼンテーションの部の応募につなげてほしいと学生に要請し、学生の自主的学習成果とプレゼンテーション能力を審査した。

公募に際しては、学長賞、優秀賞、佳作を設けて、それぞれ副賞を贈呈することをアピールして応募の促進を図った。表 1 に 4 年間の作品種別ごとの応募状況を示す。

表 1 応募作品の状況

作品種別	H25	H26	H27	H28
ビデオ	1			
ポスター	14	15	9	7
スライド	8	18		
4 コマ漫画	5	1	1	1
プレゼンテーション				87

応募作品は、大学役員、各部局から選出された教員、並びに学生代表からなる審査委員会で審査を行い各賞を決定した。表彰式は秋の大学祭の中で行い、優秀者を顕彰し優秀作品の披露を行った。また優秀ポスター・4 コマ漫画は広く学内に掲示して、本コンテストの目的でもある SNS に潜む危険への警鐘と SNS の適切な利用に関する啓発を図った。図 1 に平成 27 年度の優秀作品の一例を示す。



図 1 平成 27 年度の受賞作品

3 学生への教育効果

SNS の適正利用に関して、本イベントの前後での学生の認識調査を行った。以下の 11 項目について、イベント前に既に認識していた学生の割合、イベント後に認識している学生の割合を表 2 に示す。全ての項目で本イベント後に認識率が向上していることが分かった。

表 2 イベント前後での認識の違い

	前	後
SNS への情報発信は、現実社会と同様な義務と責任を負う必要がある	79%	100%
SNS への不適切な情報発信により、社会的な制裁をうけることがある	73%	100%
SNS で一度発信した内容は、インターネット上から削除されないことがある	71%	98%
SNS に投稿した写真から、自分の住所が知られてしまうことがある	74%	100%
SNS への情報発信は、匿名で行っていても本人が特定されることがある	67%	91%
SNS によっては、他人がメールアドレスで自分のアカウントを検索できることがある	41%	73%
SNS によっては、投稿の公開範囲を設定できる機能がある	56%	92%
SNS では他人の投稿に自分の名前がタグ付けされると、そこから自分のプロフィール情報等を確認される場合がある	38%	68%
SNS によっては設定変更しないと、プロフィールに登録した情報等が全てのユーザーに公開される場合がある	50%	85%
SNS では、過去の発言を遡ることで趣味や嗜好などが知られてしまうことがある	38%	70%
SNS では、自分の発言を限定公開していても他人に共有されると公開される場合がある	41%	78%

また、平成 28 年度のプレゼンテーションの部に応募した 87 名の学生についてアピールしたい点を尋ねたところ、以下のような意見が聞かれ、学生たちの積極的な学習意欲の喚起にもつながった。

- ・意外と匿名が本当は匿名でないことを知っている人は多くはないのではないかと自分自身もまとめていく上で気づかされた点も多くあったため、ぜひほかの人たちにも再認識してほしいことを発表します。

- ・私のプレゼンテーションでは実体験をもとに、SNS の適正利用を超えた SNS のポジティブな捉え方について言及している。ただの SNS 批判や一般的なことを並べ立てることは説得力に欠けるため、具体的な提案を意識している。

- ・大学生ならではの視点から、心理的な要因を踏まえました。みんなから注目されたい、発信したら面白いなどの好奇心が多く、事件を発生させています。その点についての例を挙げておりますので、少しでも多くの人に考えていただきたいです。

- ・SNS は非常に便利で、特に私たち大学生はほとんどが利用している。しかし私たちは便利さの裏の危険性をあまり意識せず利用をしており、実際 SNS に関するトラブルは絶えない。そこで SNS を今まで通り便利にかつより安全に利用するために身近なことで気を付けることができることは何かをまとめ、今後の SNS の利用の参考にしてもらいたいことを発表します。

3 考察とまとめ

新しい道具が開発された際に、その道具が社会に受け入れられ普及していく過程で、色々な問題を生じつつもそれらを解決しながら新しい道具と共存する知恵を私たちは身に付けてきた。その代表例として自動車があろう。自動車は私たちの生活を豊かに便利にしてくれる一方で、交通事故の増加といった社会問題を引き起こし、一時は交通事故の年間死亡者が 2 万人を超える事態になった。しかしながら、今では交通事故の年間死亡者数は 5 千人を下回っている。自動車そのものや交通システムの技術進歩もさることながら、劇的な減少をもたらした大きな

要因は教育にあると言っても過言ではない。使い方によっては凶器となる自動車であるが、私たちは教育によって自動車と共存できる社会を作り上げてきた。

SNS についても私たちの生活を豊かにする道具であるが、使い方を間違えることによるトラブルや事件・事故が増加しており、SNS を上手に使いこなす知恵が求められている⁷⁾。調査によれば⁸⁾、インターネット利用におけるトラブルの発生原因の要素として、知識・スキル不足が指摘されており、ここでも教育・啓発の重要性が再認識できる。

本コンテストは、学生の SNS についての知識やスキルの向上を目的として実施した。大学教育は、従来の講義形式の受け身の授業から、学生の主体的な学習に基づくアクティブラーニングへの転換が求められている。自分の考えを他者に説明するというプレゼンテーション行為では、アクティブラーニングが求める自主的な調査学習と論理的思考が必要となる。本コンテストにプレゼンテーションを含めた理由もそこにある。応募用紙に記載された応募動機やアピールしたい点を見ると多くの応募者から積極的な姿勢がみられた。中には、大学生の重要な問題である就職活動と SNS の関係にスポットをあてて、SNS の適正利用に言及するプレゼンテーションもあった。

今年の実験作品は 95 件であり、過去 3 回と比べると増加が見られた。ポスターや 4 コマ漫画の部では、絵心が要求されるため応募者が限定される傾向が見られたが、プレゼンテーションの部を設けることで、応募のハードルを下げる事ができた、これが応募作品の増加につながったものと思われ、より多くの学生の参加を得たいという目的が達成できたと考える。プレゼンテーションの審査では 1 件 5 分以内の口演を求めたが、87 名全員が行うのは時間的に無理である。そこで予備審査で 11 名に絞ったうえで本選を実施した。

本コンテスト参加者数は全学生数に比べると少ないものの、彼らの行為や知識が呼び水となって、SNS 適正利用の意識が全学生に波及することを願っている。

参考文献

- [1] 2015 年度 SNS 利用動向に関する調査
<http://ictr.co.jp/report/20150729000088-2.html>
- [2] 舟生岳夫、SNS とは何なのか
教育と医学 62(2), 160-168, 2014
- [3] 神戸大学生が USJ で迷惑行為 同志社大や関西外大の学生も加担か
<http://blog.goo.ne.jp/cat/e/0f2f6137d32e0fb1ced83ad7a51f8d51>
- [4] 稲本潤一、お泊まりデートを Twitter で実況される
<http://supportista.jp/2011/01/news12154242.html>
- [5] 女子学生がツイッターで「佐藤寿人のカルテみてみた」とツイート
<http://soccermatome2ch.seesaa.net/article/314596752.html>
- [6] 大村岳雄、SNS 時代のリスク管理、経営倫理 (71), 2-5, 2013
- [7] 日本ネットワークセキュリティ協会 SNS の安全な歩き方第 0.7 版、2012
- [8] インターネット利用におけるトラブル事例等に関する調査研究
http://www.soumu.go.jp/main_content/000238485.pdf